

く^{シツ}となる 夜も更行ければ 暇乞して帰けり 傳聞 横田氏も雪折の
松も 頓而打死とて承る 半尊公も打死や 武士の道とは言ながら 弓
箭はつれなきものゝふかな

二宮 莊八郎

右本書 田実氏より御借用いたし 乱筆ながら 為稽古之 湯治ニ於
て 写置者也 年十六才 ^ル (10・オ)

湯治 かながみ めて 見は
平古なる松 ^{ヒミ}の ^{ヒミ}みどりニ
^{ヒミ}秋風が吹

^ル
(ウ)

最後になったが、「雪折之松」の翻刻をお許し頂いた出水市立図書館
の山之内 雪館長、資料についていろいろ御教示頂いた出水市文化財保
護審議委員・社会教育指導員秀島 實氏に厚く御礼を申し上げたい。

(一九九三年一月一八日受理)

聞付給ひて 甚驚き給ひて 我も秘藏の若衆なるか いかて左様にあましく 十方も勿論 二十方にくれ給ひける 是尤ぶれひ至極也 去れとも 人に此事のみ 言れしければ今糺明さんとおもふ折節 伊集院掃部助聞給ひ 源次郎殿に此事うつたへ 死罪を流^罪□にして 松嶋を喜界嶋にやり 横田氏徳之嶋に流し給ひければ 心細くも兩人は 住馴し都之城をよそに見て 何國ともしらん旅の空 何か古郷に帰らん 福山より船を出し 浦吹風に帆を揚て 七月十八日と申に 太守公の御城下薩^ウ州鹿児嶋に着給ふ 夫より流海の舟端にて 三尊公と横田氏 互に袖をしほりけり 又幸の縁もあるならば ふたり對面いたさんと 市助扇子に哥を書いて 是を形見に候と 涙ながら片手に渡しける 三尊公いと、たもとをしほり あゆる涙をはらひのけ おつくし□にて開き見給ふ 其哥に

「書置くもかたみとなれや筆の跡

またおふときのおもひ出にせよ

三尊公左の袖を引ちぎり

「君ならて誰にかこれを送るへし

こひしくときのおもひ出にせよ

恋敷時を見給へと 互の形見を取替し 三尊公は喜界嶋に心さじ 横

(8・オ)

田氏は徳之嶋へときき出し ころしも秋の初 四方の風景詠る人も 故郷に心のとまりて 詠る月も打くもり 程なく七月末八日には 兩人ともに 流嶋の地着給ふ 横田松嶋の事のみ 朝夕おもふ計り二而 いっ

しかむかしに引かはりて 語り慰人もなし 少の便のあるならば 又玉章を取替さんと 四方に耳を付て 喜界嶋のたよりもやと 思ひつ、け居られける 去れ共風の便もあらされは 詮方なくも日を送り 朝夕今日事も^ウ打忘れ 心の糸も打もつれ 如何なる無縁の事とも也 只一夜の假枕にて 此牀になりしとも 袂のかはくひまも 折くことに 形見の袖を取出し 恋しとおもふ心草列て 少シまどろむ枕の下 測と成ける 此間に三尊公 此嶋に移り給ひて 互に久しき對面して 比異連理と契りを結び 替らん心の内に 早夢も打覺て 所の人を打招き 此所に堂屋あると 尋給ひければ 爰に一ツの堂こそ候と申ければ 是幸の事やと 七日参籠して おもひのほとを祈ける 不しきにて たた一年も過すして 掃部助か取成にて 帰宅の御^{9・オ} 免を蒙り 兩人ともに 本の住居に立歸る 悦ひのこゝろしるしかたく 夫より久し敷對面とて 親敷人に打向ひ 遠嶋の内ノ淋しさ 三尊公を恋したひ 喰物も 快よく成りしと向語し 皆涙を流しける 無程 庄内陣致到来 兩人ともに 忠真の則を離れて 内村半平杯共 無比類高名衆也 志和地籠城の砌 鹿児嶋の二才衆 半尊公の御盃を望て 四五人敵城へ入て 酒盃いたされけるとなん 其時 半尊公は拾六才 形容并て言へき人そなし 其座敷にて 彼横田氏亭主振二而 右の咄とも^ウ有之 遠嶋の砌 三尊公は喜界嶋にて 如何成御様子ならんとおもひ 食時の間も不忘候て 被迷たる事とも語られければ 鹿府の二才衆 鬼の目にて泪とかやと 皆啼ける 餘りかなしみ 鬢白のいひ竹のち、み^チ込も涙にしみ しほ

主を媒 無二と頼しも 去れは実の心二而候得は 痛しくおもひ直し
 請合し事なり 是非ともに一夜ともは 彼人の望に御任せ給はれと
 色こ言葉を尽しければ 三尊公暫し安して居給ふか 我身奉公の身なれ
 は 衆道に組入事堅ク 御掟も稠敷ければ 只今迄か様に打過候 一」
 (ウ)夜ともは人目を忍ひ事 安候間 望に任せ可申候 小姓とても 我壺
 人二而は無之候 内村半平 奈良原清八杯とて 世に勝れし男色ありけ
 れは 一夜ともは病氣と言ても さしての沙汰も候へし 左あらは返し
 をすべしと 奥の座敷に忍ひ入 手紙書引結び永仙に渡し給ひければ
 永仙限りなく悦び 置□なくと押いたゝき 急き市助に渡しければ 取
 手もおそしと 開き見る 其文に曰

「御状致拜見候 如仰 久敷不能貴顔候得ども 無御替之由
 目出度奉存候 然者先比」(5・オ)被仰入候一儀 誠に数なら
 ん者に 加様被仰事 不斜嬉敷罷在 人目を忍ひ 逢坂の
 関之戸にて 一夜御意ニ存候 折節御状到来いたし 飛立
 計二而 御手違も候し 明晩は御出奉待候 委細之儀は此
 人より 可被成御聞候 恐こ謹言

七月八日

「雪折の松

「横田市助様

と墨色うるはしく 實のおもひが 筆のすさみにあらはれて 見る目も
 いと、面白哉 横田氏か心中押計ぬへし 明晩と言はれしは 千年待
 の」(ウ)心地して 今宵一夜も如何して明し候半 早く明日も成しかは

曰のある内に 彼御宅の邊をさまよひて 人目を忍ふ逢坂の 関の戸に
 もあけ給へ 年月おもひの言葉 心ひらけて面白かるへしと 其夜はい
 と、長くして な、ツ日に成りて 秋風はけしく 短日暮て 戌の刻に
 もなる程に 彼御宅の邊に立寄て 間垣根よりうか、得は 只今湯引給
 ふ有様にて 雪をもねたむ肌にて 縁の柱に立掛り 高香黒髪はら／＼
 と肩に懸り 其匂ひ蘭麝も是かとあやしむ計り 態とならん」(6・オ)御姿
 左なから西施の面影 かくやとおもふ計り也 なれば飛立計 横田市助
 此美少年をみるよりも 心は千こに打碎て 耳なとさく計也 とかく
 おもふ内に 少人御床敷の内に入給 ひとて明月燈をとほし 契約したる其人を 待
 兼給ふ風情にて一燈の本にて 賦を合給ふ御姿に 弥心解て 流石の横
 田市助も心迷ふて 袖をしほりける さしてたに人を咎むる犬の聲もな
 くて 八日の月も西山に 陰にしつみければ 門の柱に立掛り 三五郎
 様と問ひければ 内より馳出給ひて 是へ御入候得と 小座に誘引し給
 ふ 半座分て物語し 夜深更に成ければ 同シ床に枕を」(ウ)并へて お
 もひの程を晴しける 其時の心中筆にも尽されず 最早夜も明方に成ぬ
 れは 人目の関を忍ひ出 暇乞して帰りける 此事いと、包といへとも
 一人式人聞出し 取こに沙汰をして 常に親む傍輩の人の 三尊公に
 打向ひ 過し九日の朝朝 横田市助殿に行逢ひしか 御手前の袖の匂ひ
 □□候など、言ひ□「去八日の夜横田氏の手を枕に被成候て 終夜御振
 舞被成候など、夢見申候 此事か誠も候得は 御浦山敷候 杯と言け
 れは 三尊公聞給ひ いと、恨みしくおもひ給ひ 内に主人源次郎」(7・オ)

白石永仙とて 茶引坊主のあるか 其心直して 横田市助と兼てしたし
 き友なりしか 此人を」(ウ)頼まん 或時永仙宅に至て かの三尊公をお
 もひ奉り 寐ては夢 覺てはうつゝに 心をなやまし 余りの事に 此
 比は 心氣く□く候 とふそ 御詞を添へ給はれかし 若此事か露顯
 して 身すんしにせらるゝも 何の恨か候半 御方一情として 能御取
 計被下かし 左候得は 生涯の本望 何か不過のと 實の顔にて 割な
 くこそは頼けり 永仙も 忠真の寵愛の若衆なれば 鹿忽に返シも言け
 れは 餘り実を尽しければ おもわす□落涙に及て 扱く 左程にお
 もひ被懸しに 去れは 是非の」(2・オ)返事はあらねとも 言葉は尽し見可
 申候 壺□の玉章を御遣シ被成かし 我彼人に□□ひ 此事語り申さん
 と請合ける こゝろの内そ 頼間敷ける 嬉しくおもふに 横田か心
 盛かねしたる蒼める華の 初て開ける心地して 乱し春の青柳も 今離
 れたる心の内に悦て 硯箱を引寄て おもひの程を書黒め 是を御頼可
 申候 宜様に希なり と永仙に渡してこそ帰りける 其翌日 永仙屋形
 に出て 茶引夢所に 彼三尊公出□給ひ 永仙かかたに乗り 大手にす
 かり」(ウ) 遊び給ひける 其姿 只盛の華を散す如く 此有様には 如
 何ならん山のひしりなりとも 心迷わて有へからず 永仙ほと荒きも
 のさへも はなく振ひ 心も飛立計也 折しも人なかりしかは しば
 しか程は閉口したれとも 媒と頼まれし上は 此事言はては 武士の本
 意に不有と 懷中より市助か状を取出し 横田市助との貴公の容色に
 こゝろを懸て 寐ては夢 覺てはうつゝに 忘れ兼給ひぬる余りに 是

を遣し給ひぬ□□出しければ 押しいだゝき 如何成文そと 開き見給
 ふ」(3・オ) 其状に曰

「久敷不能拝顔候得とも 無御替□由 目出奉存候 然者
 此内より度々申上候事 御叶被下かし 左候得は 生涯之本
 望 何か過之候半 拙者事 貴尊を昼夜難忘 一ツ無□存込
 候間 是非御一情所希候 恐々謹言

文月七日

「横田市助

「松嶋三五郎様

三尊公見終りて いと、つれなき顔付にて 白石氏に打向ひ 私事

忠真仕へし身なれば 拔返シも」(ウ)難仕 又々序も候へしとて内に入ら
 んとし給ふを 永仙袖をさへきりて 少人情なきは 浮世の罪科のかれ
 は と申事候か 義經公 武藏坊辨慶に情深き故 二ツなき命を衣河の
 館に捨たり 其後又 新田式部大輔義治は日本一の美少人 義助公の御
 息大名さへ 瓜生判官に情深故 柚山の軍に打死したり 殊に衆道は
 武士の常也とかや 一夜ともは 望に御任かせ候得かし

古人の哥に

「情あれなさは人の為ならん

かならず後は身のためとなる

か様なる哥も御座候 おもへは かの横田も勇、敷有様なり 主君御
 秘藏の貴公に心懸て 身を捨てとおもふ事 武士たる者之本意 如何に
 もして主人の御前を忍び給ひて 一時の御情所希也 数ならん此茶引坊

」(4・オ)

凡 例

翻刻にあたって

1 変体仮名は平仮名に改めたが、片仮名、漢字はそのままとした。漢字の字体は原文の字体を重んじて、敢えて統一しなかった。猶、異体字は通行のものに改め、字体の少し怪しいものも敢えて気にしなかった。

2 虫喰いなどで読めない文字は□で示した。

3 読み易いように、文の終わりの外、会話の前後、読点のあるべきところ等を一マスあけた。

4 丁付けは、^(1・オ)(ウ)のような形で示した。

〔翻刻〕

明治三年 午 七月廿六日

雪 折 之 松

主

二 宮 氏
(表紙)

形見の扇子手にふれて 吹来る風を松嶋や 誰か見初ん雪折の 松を
恋しむ横田氏 風色ニ迷へる心にや 其有様を尋るに 日州庄内といふ
所を 薩隅日三州の太守公 伊集院源次郎忠真といへる人に 八萬餘斛
の領地を給ひて 栄心安座に暮シける 其家中に 松嶋三五郎とて 世
に勝れし男色有けるか 天のなせる美艸にや 容顔萬人に越て 繪に書
とも筆に不及 學問は顔回関子も不能及事 勇は子路かおもひに叶て
常に李白か文を好て 唐詩の道をもて遊ひ 春は^(1・オ)盛なる花に心を移
し 秋は東山の山端の月を友として 詩も賦し哥を吟し 誠ニ優[□]き美
人なり 此君様を よそなから見奉り 横田市助 是非とも一度の御情
あれかしと 恋く墨をすり 深きおもひを 度々毎々遣しけれとも い
また御幼稚の故にや 有無の返事もあらされは 心は千々に打碎 おも
ひの糸の引もつれ やる方なくも日を送り 涙に袖をしほりける 爰に

なった。そして、十九年三月八日から彼は戸長役場、次いで郡役場の用係、雇となっている。月俸は六円から七円であった。手許の履歴書が二十六年五月十七日までしかないのが、以下は分からないが、同様の地方公務員として一生を終えたのであろうか。莊八郎の二十代は激動の時代であった。出水郡役所に勤め出してから、彼は、二十二年三月三十日出水高等・尋常小学校器械購求の為に一円五十銭、二十六年五月十七日県下六大路線道路開削の為に八円を、それぞれに寄付している。月俸と比較すれば、彼の郷土への貢献は多大であったと言わねばならない。二宮莊八郎とはこのような人であった。その莊八郎が、十六歳の時、この『雪折之松』を書写したというのも面白いではないか。

(注一) 平成元年三月。

(注二) 拙稿「平田三五郎物語の流れ」(『研究年報』平成二年三月)に翻刻・校合している。

(注三) 都城島津家蔵本。筆者は、拙稿「翻刻 鹿児島県立図書館蔵『日州庄内軍記』」(『研究年報』昭和六〇年三月)で、その転写本である東京大学史料編纂所蔵本を校合に使っている。

(注四) 北川鐵三氏の『島津史料集』(昭和四一年五月)に本文が翻刻されている。

(注五) 筆者が二宮莊八郎の伝記を書くに当たって使った資料は、いずれも、出水市文化財保護審議委員・社会教育指導員秀島 實氏

の紹介にかかる、次の資料である。「二宮(本・分)家関係系図」「履歴書」「履歴(明10・12・1記)」「履歴(明11・12・9記)」「(賊徒再挙書類)」「旅行願」「丁丑擾乱実記」。猶、秀島氏には「雪折之松」の読み合わせもして頂いた。

中には怪しげな話もあるが、この術学的な部分も、結構、青年の知識欲に應える面をもっていたのではあるまいか。

『雪折之松』を書写した二宮莊八郎は出水郡上出水村武本（現出水市）の生まれ。二宮本家喜右衛門国禎・ヤエの四男。誕生は安政元（一八五四）年七月十一日なので、明治三（一八七〇）年七月二十六日には満十六歳に達していた。当時の彼が何をしていたのか、教育歴などは不明だが、後年の莊八郎の職歴は次のようになっている（自筆「履歴書」^{〔注五〕}等による。）

明治六年五月四日、変則第三十郷校の四等師員になった。十八歳、公務員としての最初の職と思われる。教員なので、相当の知識人であったのではなからうか。八年十二月十日には三等に昇格した。

このように教員としての道を進み始めたかと思えた莊八郎は九年六月三日、警視廳から四等巡査の職を突然？拝命し、十一年十二月二十六日まで巡査を勤めている。所謂十年軍の前夜の転職であった。十年二月十九日、九州出張を命ぜられ、横浜港から長崎へ。三月七日、柳原勅使の護衛として鹿児島へ出港し、十七日に再び帰って来ている。が、慌ただしく、翌日には又出港し、十九日、熊本県日奈久に上陸、八代に駐営。二十一日、宮之原で西郷軍との戦いが始まるが、莊八郎は二十三日銃創を負って入院。八代病院、長崎県病院で治療して、五月八日、帰京。六月二十五日には完治した。七月三日、三等に昇格。翌四日、権大警部横山勇蔵に従って、鹿児島へ向け東京を出発。船路、長崎を経て、十八日、

鹿児島着。十九日、県下伊作郷（現吹上町）警視分署詰め探偵掛を命じられている。探偵掛というのは、後述の深見有常・笠野傳次郎などを探す役であろう。八月三日には南方郷（現枕崎市方面）、十七日には出水郷と十五日前後で警視分署を次々に変えている。出水郷では警察事務を担当した。九月一日には阿久根派出所に転じ、又探偵掛となった。ここでは西郷方で長崎で弾薬を買い入れようと計っていた深見有常が、再び長崎へ出ようとして、甕島で十三名の巡査の服装等を奪い、大川村（現阿久根市）に潜伏していたのを、二十三日、中間四人ごと捕縛したという。阿久根派出所には一月余り勤務して、十月十二日、鹿児島へ引き揚げ、十一月六日には、任を終えて、東京へ向け鹿児島を立てている。莊八郎のように旧薩摩藩郷土が探偵掛となって、西郷軍の捕縛の任に就いていたのは興味深い。翌十一年一月十八日には、更に二等に昇格した。

しかし、十年軍では薩摩士族は多く西郷方についていた。莊八郎の長姉貞の嫁ぎ先竹添家の二十郎も捕らえられて、埼玉県懲役所にいた。二月二十三日、莊八郎は、何の用事だったのか、面会の為の旅行願を出している。この年の十二月二十六日、彼は巡査をやめた。帰郷した莊八郎は、翌年六月六日、出水小学校教員になっている。再び、教員生活に戻った。十四年一月十一日、大川内小学助訓となった。しかし、彼の教員生活は長くは続かなかった。翌年の八月十五日には辞職が認められている。彼が何故辞めたのか分らない。二年程後、十七年十二月二十五日から莊八郎は、今度は武本村・鯖瀬村・上大川内村・下大川内村の衛生委員と

品が既に成立していて、主人公の型としての豪傑と美少年の一对を継承はしたが、その豪傑の武勇譚を描くにも種切れ（新鮮な趣向を見出し得なかった）の状態だったのかも識れない。そこで、筋の上で新しさを出し、それが売り物の若衆物語ということに落ちついたのではないか。『賤之麻玉記』・『雪折り竹』に比べて、かなりの短篇になっていることから、そんな気がする。

主人公以外の人物では、掃部助が人情を弁えた救い神として描かれているのが注目される。掃部助が纏まって描かれるのは「柳川原酒宴」譚の成長を待つてであろう。『雪折り竹』の姉妹篇という見方はこの点からも首肯されるに違いない。又、白石永仙が『雪折之松』では恋の仲立ちをする「茶引坊主」になっていることも面白い。永仙は、『庄内軍記』に「白石永仙は紀州和歌山根来寺法師なり 軍法依有^{（注三）}抱置なり」と記され、他の「庄内軍記」にも、同様の記述が見える。「軍法」に長じた根来寺法師が伊集院家に仕えていたというのも興味深い。慶長四（一五九九）年十二月八日、安永城の戦いで、囀や偽装（落城に見せかけたこと）を駆使して、多くの大守方の兵士を討ち取ったことは、根来寺法師の「軍法」として恐れられ、宣伝されたことであろう。しかし、この『雪折之松』の「茶引坊主」には、恋の仲立ちとしての頼もしさはあっても、「軍法」に長じた根来寺法師の面影はない。『雪折之松』・『雪折り竹』・『賤之麻玉記』といった若衆物語は、正確な合戦の経緯を追求して改訂される「庄内軍記」とは別の、架空の物語として許される面を

もっていたのに違いない。

『雪折之松』は、十六歳の中村莊八郎によって書写されている。彼のような青年の読み物として、これらの若衆物語を見直すと、教養の面（倫理的なことは措く）で興味深い点がいくつかある。第一に書簡の往復。「庄内軍記」諸本に往復書簡が載るのは『庄内陣記』^{（注四）}で、志和池城における矢文の交換——春田主左衛門と伊集院掃部介の——が初めてである。これに対し、『賤之麻玉記』を始めとして、若衆物語には、必ず恋文の遣り取りなどが記されている。これらの私信は、若衆物語の一つの眼目だったかと思われるが、これを愛読した若者達は、これらの手紙を通して、私信の書き方を学んだのかも識れない。第二に和歌。「庄内軍記」諸本では、二巻本『庄内軍記』が、「新納拙斎詠歌の事」という章段をもつのを始めとして、数首の和歌を収めている。しかし、その他の諸本には殆ど和歌は載っていない。ところが、若衆物語の方はどの本も相当数の和歌を収めていて、これも若衆物語の眼目だったかと見える。和歌は、登場人物の心情を詠じたものが勿論多いが、中には場面の気分を解説したようなものもある。幕末から明治にかけての若者達は、このような若衆物語を介して、結構、和歌に親しんでいたのではあるまいか。第二次世界大戦まで、入来麓をはじめとして、喜びにつけ悲しみにつけ、和歌を贈答していたと聞くが、薩摩の兵児達は相当に和歌を嗜んでいたと見て宜からう。第三に知識。『雪折之松』にも「顔回」「閔子」「子路」「李白」「義経」等を始めとして、和漢の人名、逸話が出てくる。

考えても、この歌の世界は「美化」「真偽」「弁別」といったこととし
か繋がらないのではないかと考えるからである。「美化」「真偽」「弁
別」が「雪折り竹」「雪折之松」の作品世界に通じるであろうか。

「雪折り竹」の表紙に落書きされた和歌は何か気になるところがある。
しかし、これも今のところ、気になる以上のことはない。

「梅」という語はどこにも出て来ないが、『賤之麻玉記』^(注二)は姉妹篇と

して気になる本である。『賤之麻玉記』の「吉田平田の両雄兄弟の義を
結ふ事」の章段には、久保某が「當時名に逢ふ若衆には 先第一日州
に^ては内村半平 次に松嶋三五郎亦是奈良原清八か」と言うところが出
て来る。この言葉は、内村の登場する『雪折り竹』、松嶋の登場する

『雪折之松』(奈良原は、どちらにも若衆として描かれている)を意識
しているように見える。又、平田を「三尊公」と呼ぶのも、『雪
折之松』で松嶋を「三尊公」と呼んでいるのに一致している(「三五
郎」が「男色」の通り名になったのではないか という気もする。)

『賤之麻玉記』の吉田・平田は共に島津大守方、『雪折り竹』の、春田
は大守方、内村は伊集院方、『雪折之松』の横田・松嶋は共に伊集院方
と、三本で組み合わせが完結している風なのも意味あり気ではある。

『雪折之松』の粗筋は次の通りである。

横田は松嶋に恋していた。恋文を送るが、何の返事もない。思い余つ
た横田は、友人の白石に自分の恋を打ち明け、仲立ちを頼む。横田の心
に感動した白石は松嶋を説得する。横田の恋文には動かされなかった松

嶋も白石に説かれて、横田に逢うことを約束し、返事を送る。翌日、二
人は目出たく逢瀬を遂げた。ところが、この話がどこからか世間に漏れ
て、主人の源次郎の耳にも入る。そこに、掃部助が訴え出て、松嶋を喜
界島、横田を徳之島へと流すことになる。二人は形見の和歌を取り替わ
したりして、別れて行く。喜界島で松嶋が堂に七日参籠したお陰か、一
年もたたない内に、二人は掃部助の執り成しで帰郷することが出来る。

しかし、間もなく「庄内合戦」が起り、二人共、忠真の許を離れ、志
和池城に籠る。鹿兒島の二才衆と内村半平が酒宴を開いた時、横田が亭
主を務め、遠島の時の切なさを話して、皆を貰い泣きさせた。が、間も
なく横田も松嶋も内村も討ち死にしたとのことである。戦いは冷酷なも
のだ。

『賤之麻玉記』『雪折り竹』には、横恋慕による恋の試練が設定され
ていた。『雪折之松』は、主人忠真に対する「拔返シ」として、二人の
「衆道」を設定したところに新しさが見られ、島流しという『賤之麻玉
記』・『雪折り竹』にない場面も出て来るが、総じて筋の起伏に乏しく、
「庄内合戦」における戦死の扱いなど、誠に素っ気ない。

横田・松嶋の一对も豪傑と美少年の取り合わせらしい。しかし、横田
は「勇、數有様」と永仙に評されているが、格別の武勇譚は描かれてい
ない。従って、主人公二人の違いが思い人と思われ人ということぐらい
にしか映らず、庶民的だが、平凡という外ない。

或いは、『雪折之松』は、『賤之麻玉記』や『雪折り竹』のような作

奥書きを参照すれば、明治三年七月二十六日、十六歳の二宮莊八郎が田実某の所持していた『雪折之松』を借りて、『湯治』の間に書き写したもののようである。

表題「雪折之松」は、本文の五枚目の裏で、松嶋三五郎が手紙で「雪折の松」と自署しているのによつていたのであらう。すると、この表題は、「男色」松嶋三五郎その人を指していることになる。しかし、松嶋三五郎が何故「雪折之松」と名乗ったのかは明らかではない。冒頭部「吹来る風を松嶋や 誰か見初ん雪折の 松を恋しむ横田氏」には、雪の重みで折れた松の姿が浮かんで来ないことはないだらう。その時、それは天折に通じ、「庄内合戦」に散った若者を象徴することになりはしないかと思うが、どうだらうか。

又、この表題は、筆者が本『研究年報』の第十七号に翻刻した『雪折り竹』の表題との繋がりを考えさせる。『雪折り竹』には、本書の主役、横田市助と松嶋三五郎の名前が数回出て来るし、特に、

横田市助は亭主ふりニ出 種々様このものかたりに 松嶋三五郎君と引別れ ふもの遠島ニ有し時は 三五□君の 今朝は何をか被成覧 今宵は何をか召る覧と おもへひいだせは中々に むねはこかるる計也と 涙を□して語りければ 鹿兒島方の二才とも 鬼のめニさへ涙とかや 皆袂をそぬらしける 餘りかなしき 髪口のいひり共のちゝみ毛迄も しみてしほり成ぬ 夜もいたく更行ければ 暇乞してそ帰りける

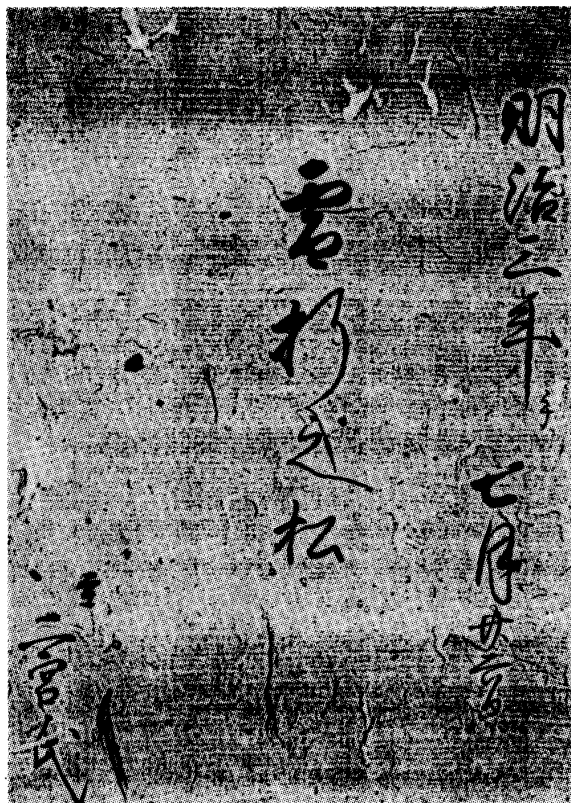
の部分は、本書本文九枚目の裏から十枚目の表にかけて描かれている、志和池城での内村半平と鹿兒島の二才衆との酒宴の場面に一致する。

『雪折り竹』で、横田が「松嶋三五郎君と引別れ ふもの遠島ニ有し時」と語るのも、本書の類が存在していたことを前提としなければ、理解しがたい。従つて、本書の『雪折之松』が、『雪折り竹』の写された嘉永二（一八四九）年十二月頃に成立していたことは間違いない。

表題の類似から、『雪折之松』『雪折り竹』は姉妹篇（或いは、同一の作者による）だったと見られる。「雪折り竹」という表題はどのようなことを意味していたのであらうか。残念ながら、『雪折り竹』にはこの表題の由来を具体的に示す文等はない。筆者は只今のところ、「雪折り竹」という表題は、「庄内合戦」で無残に人生を狂わせられた春田を比喻したものであらうか と考えている。しかし、『雪折り竹』『雪折之松』が若衆物語でもあることを考えれば、『雪折り竹』の「雪」は「雪をもねたむ肌」の「雪」ではないかという疑念も強い。

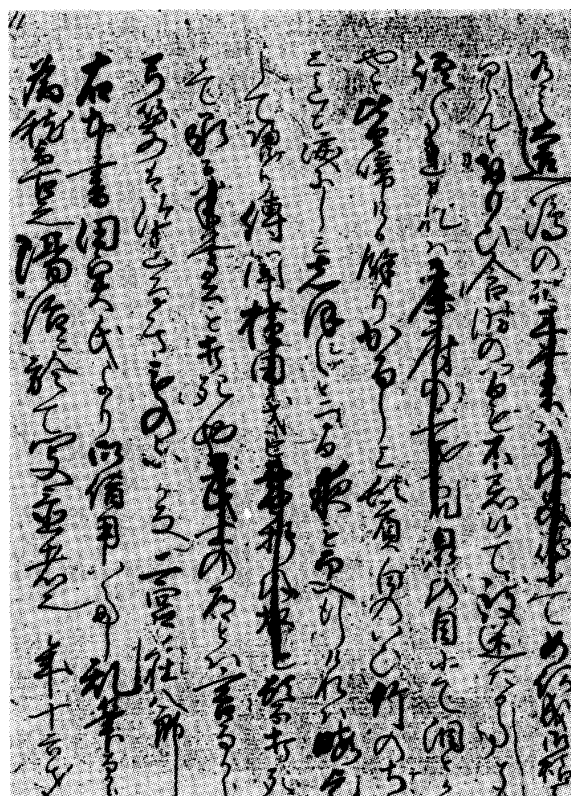
ところで『雪折り竹』の表紙には「ゆきふれは木毎に花そ咲にける いつれを梅とわきてをらまし」という落書きがある。よく見れば、この歌には「ゆき」「梅」「をら（る）」という語がある。ここから「雪折之梅」といった言葉も出て来そうである。実際、「雪折り竹」「雪折之松」という作品がこうして存在しているのだから、「雪折之梅」があつてもおかしくはない。但し、では、この歌が「雪折之□」という表題の典拠かと言うと、そうも見がたいのではないかと思う。というのは、いかに

翻刻と研究 『雪折之松』



(表紙)

今回、ここに翻刻して、紹介しようとしているものは、出水市立郷土資料館が所蔵する『雪折之松』である。同本の書誌は、写本一冊。表紙は本文と同じ半紙、一枚(写真参照)。本文十九丁。



橋口晋作

一丁十行。
主に人名に朱線がほどこされている。
の通りである。